
IS (元) 厨二病の転生者

厨二 病 (ちゅうに やまい)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS (元) 厨二病の転生者

【Nコード】

N0707Z

【作者名】

ちゅうに やまい
厨二病

【あらすじ】

厨二病の主人公は生前に願った通りにチートスペックを貰って転生した。……畜生、何を願ったんだ俺は、なんで今は全然厨二のテンションとか皆無なんだ。しかも弟達の方がチートじゃん。

これは『IS インフィニット・ストラトス』の二次創作小説です。拙い文章な上、誤字脱字が激しいと思われるので、ご指摘とかよろしく御願います。

プロローグだよ

暗い、眼を開けても光が無いから何も見えない。

大体ここ何処だよ。何だこの空間、立ってる感覚はないが別に寝てる感じもしない。なんと言うかこう、水の中に沈んでいるというか、宙に浮かんでいるような感じた。まあ、宙に浮かんだ事無いけど。

とかなんとか考えてたら向こうの方が明るくなって来た。正確には右上前方の方が。

おや、何か話し声が聞こえるねえ、ばあさんや、ちょっと行って見ようかいな。まあここには俺以外誰も居ないっぽいけど。じゃあばあさんって誰だよとかいわないの、そこ。

そんなこんなで光の方向に近付くと、何やら妖しげなエロいおねーちゃんがいた。てか、あのおねーちゃんオッパイヤベーなオイ。よし、あっちに行ってみよう。

「はいどうもお姉さん、俺と一緒にお茶でもしない？」

「はい、アホ一丁釣れましたー」

アホ呼ばわりされちゃった、悲しい悲しい。

「さて、おぬしに一つ言っておく事があるのだがな」

「なにになに？ おねーさんのスリーサイズ？」

「殺すぞ？」

「割とごめんなさい」

殺されるのはイヤだな。どういう感覚かは分からんが。

「ま、実はおぬしもう既に死んでおるんだがの」

「そーですかー」

「驚かんの？」

「割と」

だって信じられないし。

「そこまで言うならおぬしが死んだ所を見せてやろうかの」

「おい、俺なんも言ってるねーぞ」

何だこの人、読心術でも身につけているのか。

「まあ妾神様じゃし」

「あ、そうなんだ」

「ほれ、もっと妾を敬わんか。妾は神様であるぞ」

「どっからどう見ても淫魔にしか見えない俺が間違ってるんですかね？」

「ギク！……ま、間違っておるわ、そのような認識は」

「あ、そうですか。分かりました」

取り敢えず俺はこの人を信用しない事にしよう。

「ま、まあともあれ、これがおぬしが死んだ所じゃ」

おねーさんがそう言った途端に目の前に映像が見える。うわ何この感覚気持ち悪い。

……うわあ、何この死に方。なんかいきなり窓から飛び出したと思ったらイタい事言ってる死んだよ。この死に方なんて言うの？ イタ死？ イタ死とでも名付ける？

「そしてイタ死したおぬしは死ぬ寸前にある事を願った」
心読んでんじゃねーよビッチ。

「消すぞ？ おぬしの魂ごと消すぞ？」

「どーもまことにあいすいませんでしたー」

「……」

「私めが悪うございました、お願いですからどうかその手の波動のような物をおさめてください」

「なら妾の話の腰を折るでない」

「いえっさ」

さて、そろそろ真面目に聞くか。俺今かなり危ない状況みたいだし。

「おぬしは死ぬ寸前に『転生したい』と願っておったのだ」

「ほっほっほ、この世界に置ける「邪神」の称号を持つ妾のオモチ
ヤになれた事を光栄に思えよお、小僧？」

第一話 いくら転生者だからって生まれたときくらいは平和でも良いよね

皆さんどうもこんにちは。転生してもう三年、既にこのセカンドライフに嫌気がさしている所存でございます。

さて、そんなこんなで転生した俺だが。ここで困った事が出て来た。というかぶっちゃけ生まれてから困ってしかないが、それはともあれ。

俺には、「転生した」という記憶しか無い。

……最悪だろこれ！ 転生した意味ねーじゃん！ なんかこう、どっかの創作物の世界に飛ばされたとか、今自分はどんな能力持ってるとか、何より前世の記憶とか！

……無駄か、あのおねーちゃんにそんな事を期待する方が無駄だな。何か頭ユルそうだったし。ついでに股も。

……とか思ってたら空からタライが落ちこちてきた。何！？ 天罰！？ 天罰的な何かなのかこれ！？

まあいい、とにかく今は生まれたとこがとにかく平和な事を祈ろう。求めれば与えられるのさ、多分。

そう思ってた時期が、俺にもありました。

俺の体欠陥だらけだったアアアアアあああああ!!!

まず第一に！ 俺の性別が不安定！ もうこの時点で平和とは言えない！

第二に！ 何故か先天性色素欠乏症煩っている！ ぶっちゃけるとアルビノ！ そしてそれによる弱視！ しかもとんでもなく紫外線に弱い！ 外出たら肌が爛れるように痛い！

……そして認めたくはないが認めざるを得ない最悪の事実。どうやら俺の母親は――

「ほっほっほ。小僧、そろそろ食事の時間じゃぞ？ 早うこつちに
来い」

(エロいおねーちゃん)

母親が面白いのだつた。

最悪だ
アアアア
あああああ
!!!!!!!!!!!!!!

「今更だがなんでここに居んだこのビッチ！」

「ほほう、小僧は向こう一年飯はいらんと見受ける」

「申し訳ありませんでしたお母様、どうかこの小僧めに食事を与えて下さいませ」

畜生！
いくら母親（仮）だからってやっていい事と悪い事がある

だろ！　つか、飯抜きの間が一食とか一日とかじゃなく一年って、それもう虐待じゃん！

「てか、家族構成と容姿が恵まれるつつったよなオイ。そこんどこどーなの？　俺一ミリも恵まれてないよ？」

「恵まれておるじゃろう、母親は神（但し邪神）じゃし、見た目も珍しい上に中性的でよいではないか」

「どの辺がだこのビッチ！　大体見た目がよくても外出られねーし目も悪いんじゃないモンになんねーだろ！」

「甘い、小僧。そんなもんはほれ、妾が与えたチートスペックでなんとかせい。後おぬしビッチって言ったの」

「言ってますん」

「言ったの？」

「言ってますん、むしろ逝け」

「さて、飯を片付けるとするかの」

「誠に申し訳ありませんでしたアアああ！！」

畜生！　いくら笑いの基本は天井だからって命賭けるような真似までして笑い取りたくはないわ！

さて、そんな欠陥だらけの俺の体にも長所はある。というか無かったら即首吊りか投身でもしてるわ。

まず第一のチートスペック。脳味噌が既に異常。……いや、だって生まれて三日で円周率の計算してみたら頭の中にエライ量の数字が浮かんで来たんだぜ？　最早これ異常だろ、というか以上と言わずしてなんと言う。

ちなみにこの事をあのビッチ（神）聞いてみた所――

『おぬしの頭の良さはこの後出てくる天才発明家の約100倍じゃ！』

言い方がバカっぽかったとか思っていないよ？ ホントだよ？

なにはともあれ、俺の脳味噌はすでにスパコン（笑）レベルのよう
だ。しかも円周率の計算やったのうたた寝状態の時だったし。本気
出したらどうなんだろう、まだやらないけど。後記憶力とかもヤヴァ
イ。辞書流し読み—— つつーよりパラパラと捲ってただけで内容全
部頭に入ってた。一字一句違わず言えるから恐ろしい。

んで、第二のチートスペック。身体能力が神懸かっている。

いや、いくら何でも全力疾走で音速超えるって無くね？ つか、そ
れで生きてるってどうなの？ しかも反射神経とかも明らかに人間
ではない速度だった。これ、魔改造つつーより最早別モンじゃん。
極度の弱視で見える範囲に入って来た拳を避けれるってなんかもう
若干ハイになるよね、現実逃避で。

さいごに、第三のチートスペック……と言っているのかは分からな
いが、母親（仮）の実家がイカレている。え、何かって？ ……い
いか、あのビッチの実家は——

日本最強と言われ警察や政府にもパイプがあるとかいうヤクザの総
本山——『朽木組』の次期当主。

グッバイ俺の平穩。

まあ今はそこで暮らしてるんですけどね。何でも『こいつが順当に
育ったらかな良い頭になるんじゃないかねえか』とか思われてるっぽ
い。そりゃ、頭脳戦では既にこの世界の誰にも負ける気はしないけ
どさ。

……ああ、俺の名前？ ……あんま言いたくなかったんだが。ど

うやら朽木組の当主であるジーさんが付けたらしい。が、はつきり言わせてもらおう。そのジジイはジイ様の皮を被った中学二年生だと。

朽木 華瑠魔^{かるま}、それが俺の、今生での名前なんだとさ。

第一話　いくら転生者だからって生まれたときくらいは平和でも良いよね（後妻

未だにI SのIの次も出てこない。かなり不味い、これは不味い。

誤字脱字や日本語ミスの指摘など、受け付けておりますのであった
らガンガン言って下さいお願いします

第二話 別に転生したからってそいつが主人公って訳でもないし最強って訳でも

やあどうもこんにちは、九歳になった転生者でございます。

……え？ 名前はとうしたって？ ハハハあんな厨二病な名前乗りたくないよ。

そんな事はともかく、最近になってやっと自分の事が大体把握できて来た。

まず第一、俺の頭はとんでもなくいいがそれと同じ位燃費が悪い。普通の人間の血糖値は大体80-100mg/dlぐらい。俺も平常時———というか、自分の年齢プラス十歳位までの計算なら無問題なんだが、それ以上の事をしようとするとな脳味噌が血中のブドウ糖をほとんど食っちゃまって一気に低血糖状態になり意識がなくなる。はつきり言ってチートスペックの意味が無い。ありがたいっちゃありがたいが。ただ、これに関しては血糖値を350-400mg/dlくらいまで上げる、または普通に成長すれば燃費もよくなるらしい。あのビッチから聞いた話だからあんま信用できないが。あ、記憶力に関しては何の問題も無かった。

続いて第二のチートスペックである身体能力の異常だが、これはただダラダラしてたら普通に、つまり六歳児レベルにまで落ちた。だが、これも鍛えればあのチートスペックに戻れるそうさ。今生では運動はしないと誓った六歳。それもどうなんだろう。ただ、これは別に低い訳じゃなくその年の平均を維持し続けるらしい。これもビッチから聞いた話だけど。

で、俺のマイナス面についてだが、これは何一つ改善されていない。外出する時には長袖長ズボンに、素肌を隠さなきゃいけないから手袋装備。このままでも熱いつてのに顔が出たままだから包帯を巻く事

にした。髪の毛も痛みやすいからパーカー羽織ってフードまで被る。グラサン（度が入ってる）もする。考えてみてくれ、素肌の一切見えない六歳児。

どっからどう見てもイタイ子です、本当にありがとうございます御座いました。

まあ滅多に外出ないからいいけどさ、これについては。

本当にひどいのもう一つの方のマイナス面だった。

性別が不定期で変わるって何？

朝起きて女になったと思ったら昼寝して男になってたってビビるわアアアア！！！！

……叫んでちょっとスッキリした。が、問題は何一つ終わっていない。

このデメリットはあのビッチが『面白そう』の一言でつけやがった。畜生、神様なら何でもやって良いのか、美人なら何されても許されるのか、いや違う。

そう思って男に固定しろと言ったら――

「おいビッチ、俺の性別男に変えろ。というか固定しろ」

「なんじゃ、よいではないか性別位。後今ビッチって言ったから今から一週間飯抜きな」

「ふざけんな、今はまだ良いが将来どうすんだ。女物の服来て朝起きたら男になってたって、修学旅行とかどうすんだよ！ 後言ってもせんから飯は食わせて下さい」

「そもそもおぬし学校に行っておらんじやろう。後ちゃんと聞こえ

てたからの、少なくとも強は飯抜きじゃ」

「それはお前がアルビノとかふざけた見た目にした所為だろうが、俺は悪くない。あと結局飯抜きはやるのかよビッチ！」

「だったらあの格好で学校に行けばよいじゃろうププ。後今『ビッチ』って言ったの聞こえてたからな、絶対言ってたからな」

「ふざけんな、小学生ドン引き超えてトラウマになるだろ。流石にPTA問題にまで発展させたくねーんだよ。後絶対言ってません」

「その辺は大丈夫じゃ、何せおぬしは日本最大のヤクザの当主の孫じゃからの。あと言ってたから、おぬし言ってたから『ビッチ』って」

「それが余計に問題だろうが、いくら警察とパイプあるから問題起こしても大丈夫だったって友達ゼロで机に突っ伏するとかしたくねーんだよ、保健室登校もいやなんだよ。後言ってないって言ってるだろうがこのビッチが」

「はつきり言って面倒じゃからいやじゃ。後今ビッチって言ったから飯抜きな」

なんやかんやあったが結局マイナス面についてはほとんど改善されなかった。ついでに飯は抜きだった。ただ、弱視に関しては眼鏡をかける事で正常、とはいかなくても日常生活に支障が出るレベルではなくなった。

さて、ギリギリ人並みの生活が送れるようになった俺だが、実は三年前に嬉しい(?)事が起きた。

弟が生まれました(しかも双子)。

マジかよと思ったんだが、一つ疑問も残る。あのビッチいつ孕ん

だ？ 確かこの家に来てからは外に出ては無いと思うんだが……まさか組の人間？ もしそうだったらジイさんにたたっ殺されるぞ、男が。

とか思っていたんだが、どうやらこのビッチは人間とは子どもの作り方が違うらしい。何でも、輪廻転生の輪に加わってるまだ肉体を持っていない魂なら自由に子どもにできるとか。それ、選ばれた奴ずるくね？ とか思ったがよく考えたら俺もだった。ちなみに、弟達は前世とか転生時の記憶は無いらしい。よかったね弟達、君達は普通に救われた魂だよ。

そんな弟達だが、何を血迷ったかあのビッチ、そいつ等にまでチート能力付けやがった。可哀想だろとか思ったが、内容がすばらしく厨二だったので聞いた時はうっかり笑っちゃまった。てか、双子で能力が微妙に違うとか芸が細かいなオイ。

まず兄の方、頭は俺の1%ほどだが、燃費が良いから普段からヤバいらしい。これ俗にいう天才って奴だよね？ あ、身体能力もかなり異常だが精々自分の年齢プラス十歳レベルの身体能力だそうだ。動かなきゃ落ちるが年齢によって衰えはしないって、それ神だろ。弟の方は頭が平常時の俺——つまり、自分の年齢プラス十歳レベルの事なら処理可能——位だが、これも燃費がよく普通に使える。で、身体能力なんだが、これがヤバイ。もうヤバイを通り越してヤヴァイ。何だようっかりで音速に追いつきそうって。しかもそれが持続できるって。おまえ実は青いハリネズミだろとか思ったが見た目が違った。

そう、見た目が違ったのである。

こいつ等の見た目は何を隠そう、プラチナブロンドに淡い青の瞳、生まれたてだが可愛さと格好良さを併せ持った——まあ、まだ可愛いだけだが——中性的な美少年達だった。

……あえて言おう、俺よりチートであると！

一卵性らしいので本当にそっくりなのだが、少しだけ瞳が切れ長な方が兄、少しだけパッチリお目目なのが弟だ。見た目の色使いが日本人とはかけ離れているので、そう言うので虐められない様注意しとこう。うっかり病んじやったら大変だよ、世界が終わる、冗談抜きに。

因みに俺はこの二人はどんなに遠くても眼鏡が無くてもこいつ等の何かを認識（声を聞くとか触るとか影を見るとかでも）できれば見分けられる。何故かって？ 簡単な話だ。そう言う超能力を貰ったからだよあのビッチから。実に使えないと思った俺は悪くない。

兄に『氷魔』、弟に『炎魔』と名付けようとしたジジイをドロップキックでノックアウトさせ、兄は『賢太』^{けんた}、弟は『雄太』^{ゆうた}と名付けた俺は悪くない。悪くないったら悪くない。ちなみに、あのビッチは二人を生んで一年で行方不明になった。消える直前に「飽きて来たの」とか宣ってたから多分天界とやらに帰ったんだろう。嬉しい限りだ。

ああ、そう言えばこいつ等が生まれた年に『女性にしか反応しない』とかいう兵器が開発された。何でも世界最強の戦闘力だとかなんとか。もとは宇宙開発用だったらしいが、じゃあ宇宙にコロニーができたのかと聞かれたら、そんな事は後五年は先だろうな。

その兵器の最大の特徴にして欠陥——女性にしか反応しないという特性があるため、女尊男卑の世界になっちまったのが原因かは知らないが、どうやらその兵器は何やらスポーツとなっているらしい。開発者もバカだろとか思ってたかもしれないが興味が無いので関わらない事にする。

「おにちゃん、おにちゃん、あそぼ？」

「……あそんで、ください？」

「いいぞ、部屋の中だけなら」

うーん、世界は平和を取り戻してきた――

「ふははは、せっしやはさむらいでござるー！」

「いや、侍はござる口調じゃ無い……って、その真剣どっから持つて来た雄太！」

取り戻して――

「……おにいちゃん、これ……」

「んゝなにになに？ 何か壊したか？ ……ってお前拳銃なんてどっから持つて来たんだ賢太！ それはそんな簡単にバラバラにしない物じゃないの！」

取り戻し――

「おにちゃん、おにちゃん、みてみて！」

「……みて」

「どうした二人とも……って家の柱で千手観音像とか作らない！」
賢太がチョークで彫る所を描き、雄太が素手で彫ったそうだ。

一切平和を取り戻してねえ！

第二話 別に転生したからってそいつが主人公って訳でもないし最強って訳でも

感想とか貰っちゃったぜやっほう！

すごく嬉しくて興奮して徹夜までしちゃいました。ありがとうございます御座います。

うっかり新キャラとか出しちゃったけど大丈夫かな、バッシングとか貰わないかな。割と心配です。

誤字脱字や文章がおかしい所などがあつたらご指摘お願いします。

追伸、使わなかった没ネタ

弟達が生まれたと発表した時に入れようと思っていました。

弟（双子）生まれたアアアアあああああ！！！！！！！！！

弟！弟！弟！弟おおおうううううわあああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああん！！！！！！！！

あああああああ…ああ…あつあつー！あああああああああ！！！！！！
弟弟弟おおおうううあわあああああ！！！！！！

ああクンカクンカ！クンカクンカ！スーハースーハー！スーハースーハー！
いい匂いだなあ…クンクンっんはあっ！弟達のプラチナブルンドの髪をクンカクンカしたいお！クンカクンカ！あああ！

間違えた！モフモフしたいお！モフモフ！モフモフ！髪髪モフモフ！
カリカリモフモフ…きゅんきゅんきゅい！

生まれたての弟達かわいかったよう！！あああああ…あああ…あつ

第三話 どう頑張っても基本数には勝てない

皆さんこんにちは、十二歳になった転生者です。名前はまだ無い……事にしたいですね。

そんな現実逃避は置いておこう。今俺は地味に忙しいのだ。いや、嘘。本当はめっちゃ忙しい。何故かって？ それを言う前に六年前にできたISという兵器の事をちよつと話させてもらおう。あ、今回は多分こんな感じでいきまゝす。

IS——正式名称は『インフィニット・ストラトス』。宇宙空間での活動を想定して女子高生が一人で（……）開発したマルチフォーム・スーツ。簡単に言えば『宇宙でも使える着用型決戦兵器』みたいな物、だと思う。ちなみに、俺は制作者とは面識が無いが法務省のPCを賢太がハッキングして年齢やら家族構成やらを調べた。名前は世界中で知られていたし簡単だった、とは賢太談。さて、そんな俺TUEEEEEEEEE兵器のIS、欠点は女しか起動出来ないって事と、ISを作るのに一番重要なコアという部分はその女子高生、いや、元女子高生——篠ノ之束と言うらしい——しか作れないという事らしい。いや、作れないはずだった（……）し、女性しか乗れないはずだった（……）。え、なんで過去形なのかって？ 簡単な話しだ。

「兄ちゃん！ 早く行こうよ！」

「……時間は、守らなきゃ」

「その前にお前等は規則を守らなきゃな。むやみやたらとIS展開すんなって言っただろうが！」

黙っていた。

で、その後の俺の事だが――

「血糖値400で安定」

「輸血用血液パックも大丈夫です」

「ブドウ糖も準備OKです」

血糖値をひたすら高めていた。

いや、これには訳があるんだ。前に言ったと思うが、俺は血糖値を上げたら脳味噌が篠ノ之束（笑）位のチートスペックになるらしい。それをうっかり研究所長に言っちゃったら

『じゃあ、朽木君にはその状態で研究者側に回ってもらおうか』

爽やかな笑顔がイヤに眩しかった、とだけ言っておこう。……グスン

そんなこんなでISの研究をしていた俺だが、はっきり言おう、チートって反則だね。

だって今まで完全なブラックボックスとか言われてた（らしい）ISのコアとか普通に分かったもん。まあ、他の人には分からないらしくあんまり伝わらなかったんだが。

それはとにかく、俺はISについて大体分かるようになった訳だ。分かっている物を作るのは簡単な訳で、しかも自分がチートスペックだから原型を超えるのも簡単だった訳で。

率直に言おう、IS（コア含む）を三機作っちゃった。

一つ目は試作品という事で俺のだが、もう二つはそれぞれ賢太と雄太にあげた。というか元々それが目的だった俺はそれが終わったからさっさと帰ろうと思ったんだが。

「じゃ、今までお疲れさまでした」

「おっと待ちたまえ、君はまだここをやめる事はできないよ？」

「いやなんでだよ、もう俺の仕事終わったんですけど」

「いいや、まだだよ。君にはまだ仕事が残ってるのさ」

「……聞きたくないんですけど、なんですか？ その仕事ってのは」
「簡単な話さ。君の弟達のデータが取りたい、だからここに連れて来てくれないか？」

「いや、それなんかめっちゃ危なそうなんですけど」

「大丈夫だ、データと言っても遺伝子情報なんかの事じゃない。戦闘データを知りたいんだ」

「人の細胞ガッツリ取っという台詞じゃないよねそれ。……まあ、俺の監視ありなら良いですよ」

「チッ、分かったよ。じゃあそれで良いから速く連れて来てくれたまえ」

「今舌打ちしたな？ 聞こえてたぞオイ。後分かったがなんで上から目線？」

そんなやり取りがあって、今俺と双子は倉持技研のアリーナに来ていた。目的は双子の戦闘データ……というか、機体データを撮るため。

「よしお前等、IS展開していいぞー。俺はここで待ってっから」

「いや、君もやるんだよ？」

俺の戦闘データも取るようだった、めんどくさい。

「じゃあいくよ、賢太！」

「……やろうか、雄太」

「……せーのっ」

「変身！！」

その瞬間に二人の体を光の粒子が包む。とか思う前にはもう二人とも装着を終えていた。速いなおい、今のタイム0.5秒かかってないんじゃないのか？

「ただいまの二人のIS装着時間、0.32秒。速いね、そこらの国家代表候補生と同じかそれ以上だ」

「……まあ、常日頃装着だけならしてますからね、あいつ等」

「……まあ、ばれなきゃ良いんじゃないかな」

良いのかよ、それで。組の人間はもう大体知ってんぞ。

「正義の炎で悪を燃やす、ジャスティスレッド！」

「正義の氷で悪を凍らす、ジャスティスブルー！」

「二人あわせて、（せーのっ）」

「「正義戦隊、ジャスティスレンジャー！！」」（ドドン！）↑
双子の背後で赤と青の爆発

「……お前等、本当にそれ好きだなオイ」

そう、こいつ等のISは（こいつ等の希望で）こいつ等の好きなヒーローの形をとっている。というか、ほぼ同じだ。まあ、二次移行すりゃ変わるかもしれんが。

「よしお前等、これから二人で模擬戦やれー」

「いや、君もやるんだよ？」

「面倒だからパス」

「あーあ、もしやってくれるんだったら行かなくても卒業できる高校手配してあげるのになー」

「よっしお前等、俺が相手だぞー」

べ、別に高卒はしたいけど学校行くのが面倒だとか思っていないんだからねっ！！

さて、俺も装着しますか。

「よっこらしょっと」

「あはは、兄ちゃんおじさんみたい」

「……兄さん、ちよっとおじさん」

「おいそこの双子、的確に俺の心を削るのは止めたまへ」

……割と凹むな、十二歳にしてオッサン呼ばわりは。

「それじゃ、模擬戦開始するよー」

「「はーい！」」

「……いえっさ」

結果？　ボロ負けですけど何か？

第三話 どう頑張っても基本数には勝てない（後書き）

いつもより遅れました。そしてこれからどんどん更新速度が遅くなって行きます。みてくれている方、誠に申し訳ありません

第四話 厄介事は誰でも一度は通る道と諦めるべし。……べ、別に特典に釣られ

今回あまりギャグが無さそうです。他の回があるって訳では無いですが。はつきり言って繋ぎ回ですごめんなさい

第四話 厄介事は誰でも一度は通る道と諦めるべし。……べ、別に特典に釣られ

十五歳になった転生者です。昔の言い方で言えば元服ですね、成人です。どうでも良いか。

そんな成人が何をやっているのかと言えば――

「あーあ、一体何やってんだか、折角の春休みだつてのに」

「兄ちゃんいつも家でゴロゴロしてんじゃん」

「……毎日が日曜日」

「いや、いつもお前等に付き添って倉持に行ってんじゃねえか。アレマジで面倒いんだぞオイ」

「そんな事より早く制服縫ってよー」

「……早く早く」

「そんな事よりって……。ったく、わーったから急かすな、針刺さるのって意外と痛いんだから」

弟達の制服を仕立てていた。何故かって？ 当たり前だろ、入学するんだよ

IS学園に、3人そろってな。

前に模擬戦をした時のエサで『出席しなくても良い高校』に入学できるとのがあっただろって？ 俺もそう思ったさ。だがあの所長にそれを聞いたらな――

「すまん、ありゃ嘘だった」

思わずドロップキックをかました俺は悪くない。

「おらー、やっと二人分上がったぞコノヤロー」

無理矢理テンション上げて言ってみたけど誰も反応してくれないよ。
というか家に誰もいないよ。

二人は買物（IS学園に行くための準備）に行ってるし、家に常駐してる奴ら（組の人間）はそれにつき合わされてるし、ジジイはナンパに行ってるし。専務さんに怒られてたけど。

さて、暇になったし取り貯めてたアニメでもみるか。

そう思ってテレビを付けた瞬間――

『はい、始まりました昼まで生テレビ』

『今日は話題の織斑一夏君についてです』

「……織斑一夏？ そんな有名人居たっけ？」

記憶力には自身があるんだが、俺の脳内データベース検索（今設置した）には引っかからない。顔写真まで出ているのに分からないとなると、知らないだけかもしれない。というか多分知らないんだろう。どうでも良いけどすげえイケメンだな、死ねば良いのに。

『私よく分からないんだけどねえ、やっぱりこれってすごい事なの？』

『そりゃあ、世界で初めてですから』

なんだなんだ、一体何をしたんだ織斑一夏は。落とした女の数世界一とか？ もしそうだったら絶対ブチ抜く。脳髓ブチ抜く。

『――男にISが動かせるなんて』

……なんだった？

~~~~~

あ、場面転換はいりまーす（b v作者）

~~~~~

「何のようだ所長、くだらねー用事だったらぶっ飛ばすぞ」

「僕がそんな事で君を呼ぶとも思っているのかい？」

「こないだ夜中に呼んだ挙げ句『ジュース買って来て』って言ったのまだ覚えてっからな」

「……織斑一夏君の事は知っているかい？」

「聞けやこの野郎」

「……知っているかい？」

スルーかこの野郎、都合の悪い事はスルーかこの野郎。夜中が基本的な活動時間だからよかったが。

「知ってるが、それがどうした？ てか、あいつはこれからどうなるんだ？ あんな公にされたらエライ騒ぎだろうし」

ちなみに、俺や弟達に付いては倉持技研の秘密兵器だが、入学したら徐々に明かすらしい。マスコミとか追っかけられて家帰るのが面

倒くなりそうだな。

「その事について言おうと思っていたんだよ。まずは彼のISについてだけだね」

「……『彼の』？ ってことは専用機が与えられるって事か。すげえなオイ。俺にもくれや」

「君は自分で作れるだろう？ 　　というか既に持っているじゃないか」
「すっかり忘れてた」

割と物覚えが悪いかもしれない俺。けど自分の事なら忘れたって別に問題ない……はず。

「とにかく、彼のISはウチで作る事になったから」

「へーそーなんだー。協力はしないぞ」

「いや、そっちについては良いんだ。ただ、日本の代表候補生である更識簪ちゃんを知っているかい？」

「知らないけど、そいつがどうしたんだ？」

「いや、彼女の専用機である『打鉄式』の開発メンバーが皆織斑君のIS開発に引っこ抜かれてしまってたね」

……読めた。これ、そいつのIS作れとか言われるんじゃないだろうか。というか多分そうだな。メンドクサイ、またあのゲロ甘い砂糖水飲まされんのか。カブトムシにでもなった気分だったわ。

「いや、半分だけ正解かな」

「もう半分を聞きたい所だがその前に心読むな」
割と読心術を心得ている人間が多い俺の周り。

「彼女のISの事だけどね、彼女が自分で作ると言っていたんだ」

「へー、そんな難儀な事をよく引き受けたもんだ」

「いや、違う。言ったろう？ 『言っていた』と」

「……自分から言い出したって事か？ それ、めっちゃ大変じゃね？」

「そう、とても大変だ。そこで君の出番だ」

「だが断る」

「……和洋折衷何でもござれ、帝王ホテルの最高級レストランでの食べ放題チケツト二枚」

「三枚だ、俺が行けなくなるだろ」

「弟達優先なんだね。良いよ、三枚にしよう」

「のった」

最近美味いもん食ってないからなあ。というかたまには自分以外が作った飯が食いたい。自分が作った物ってインパクトに欠けるんだよなあ、どんな見た目か、匂いか、味か。全部分かっちゃってるんだし。

「で？ いつから手伝えば良いんだ？ その、さ、さら……なんだっけ？」

「『更識簪』ね。手伝うのは学園に入ってからで良いよ。というかそこで手伝ってあげてね」

「……ちよっと待って、え？ もしかしてその更識さんってまだ子どもなの？」

「そうだよ、今年で十六歳の子どもだ。ついでに言うと君も子どもだけだね」

そう言われたらそうだった。けど、転生前の精神性が残ってるからそんな気があんまないな。転生者って忘れてる事が多いけど。

「にしても、その年でISを作るだなんてすごいなオイ」

「まあ、彼女は血筋からして優秀だからね。お姉さんもすごいよ。

一人で第三世代のISを作ったんだから」

「そいつは凄いな、うっかりしたらそいつがコアを解析しちまうんじゃないか？」

「うん、君がそう言うのと嫌味に聞こえるよね」

あ、そっか。そー言えば俺 I S 一から作ってたんだ。忘れてた。

「とにかく、彼女の事を頼んだよ。少し人嫌いな所があるから頑張っ
てね」

「さりげなく一番最初に言わなきゃ行けない情報を最後に言うのは
やめてくんないかな」

「じゃ、今日はもう帰っていいよ」

「オイ」

……面倒な事が増えそうだな、俺（十弟達）の高校生活。

第四話 厄介事は誰でも一度は通る道と諦めるべし。……べ、別に特典に釣られ

やっとな次回から本編突入。でも行進速度は相変わらず亀です。
誤字脱字や日本語の訂正など、ご指摘受け付けております。

第五話 一生自分の視点しか見えないってもしかしたらちょっと不便（前書き）

遅くなってゴメンなさい。これから視点分けを多用すると思います
がそれでもよければどうぞ

第五話 一生自分の視点しか見えないってもしかしたらちょっと不便

side 一夏

「全員揃ってますかー？ SHR始めますよー？」

教卓の前でオロオロしている女性教師。しかし、身長は低いわ服はだぼっとしているわ眼鏡も若干ずれているわで、なんというか『子どもが無理して大人の服を着ました』的な不自然さ、というより背伸び感がするんだが、俺だけだろうか。

「はいせんせー！」

「な、なんでしようか……ゆ、雄太君？」

「兄ちゃ、じゃ無いや。姉ちゃんがまだ来てませーん！」

「ふ、ふえっ！？ えと、あの、一体どうすれば……」

「……後で来ると思うので、大丈夫です」

そして最早背伸び感というか実際に背伸びしてここに入ったような子ども達まで俺の左に居る。なんなんだここは、実は高校ではなく小学校だったりするのか。

「あ、じゃ、じゃあまず私の自己紹介をしますね。山田真耶、皆さんのクラスの副担任になります、い、一年間よろしくお願いしましゅっ！」

囁んじやったよ山田先生、ますます子どもっぽい。けどそれを指摘する余裕なんて俺にある訳が無い。なぜか、簡単だ。クラスに俺以外男が居ないからだ。

「やまだまや、やまだまや……！」

「……上から読んでも、下から読んでも、山田真耶」

「そ、そうなんです！ 昔からそれでからかわれたりして……」

子ども（っぽい大人）と子ども達が戯れているが、そんな事で俺に集まる視線が全てなくなった訳じゃない。いや、自意識過剰とかでは無く割とマジで。あと前言撤回、男はあと二人居た。ただし子ども（見た目は）だが。

ちらりと窓際に視線をやる。幼馴染みである篠ノ之箒に視線で救いを求めるが、箒は子ども達を微妙に興味深そうな目で見ている。あ、俺の視線に気付いた。と思ったらそっぽ向かれた。……おれ、嫌われてんのかなあ。

「……くんっ！ 織斑一夏君！」

「は、はいっ！？」

やべ、完全に不意打ちだったから声が裏返っちゃった。案の定周りからクスクスと笑い声が聞こえる。だがしかし、ここで負けてたらきっと俺は一年間真っ暗な青春を送る事になる。そんな気がする。そんなことになってたまるか！

立ち上がって後ろを向く。うーん、これはかなりきつい。が、そんな事には負けない！

「え、えっと……織斑一夏です、よろしくお願いします」

一応儀礼的に頭を下げたが、何なんだこの『もっとしゃべって』的な視線は。そして『これで終わりじゃないよね』的な雰囲気も何なんだ。俺そんなに話す事無いぞ。

「かーらーのー？」

「……かーらーのー？」

そして俺の横に座る子ども達（見た目は何か期待するコール。……仕方ない、これでくらい奴だなんてレッテルを貼られても困る。もう一言言ってやろうじゃないか。

「以上です！」

「以上かよ！」

「……どんだけー」

おいそこの子ども二人、これ以上は勘弁してくれ。もう話す事なんて何も無いぞ。
とか思ってたら背後に何やら気配が――

パアンッ！！

「いっ――！！ げえっ、関羽！？」

パアンッ！！

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

「あ、織斑先生もう会議は終わったんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

「い、いえっ。副担任ですから、これくらいはしないと……」

おーい、山田せんせー？ 顔を赤らめるのはちょっと人としてどうなの？ 同性に対してその感情はまずいんじゃないの？

「諸君私が織斑千冬だ。君達新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言う事はよく聞き、よく理解しろ。逆らって

も良いが、私の言う事は聞け。いいな」

なんと言う暴力発言。しかも最後疑問系じゃなく命令形だったよ。が、そんな事は関係なく教室に黄色い声援が響き渡る。

「キャー！ー！！ 千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

えらい声援だな、てか最後の奴、そんな事言ったら本当に凹かにかにされて死ぬぞ？

パアンッ！！

「ええい、静かにしろこのひよっ子達め。そしてお前は満足に挨拶もできんのか、織斑」

「今なんでたたいたのさ。いや、千冬姉俺は……」

パアンッ！！

「織斑先生と呼べ」

「……織斑先生」

「え、嘘……。織斑君って……？」

「千冬様の弟……？」

「いいなあ、変わってほしい……！！！」

おい、最後の奴。この人の弟ってのは意外ときついんだぞ？ 何せ家事全般やらなくちゃいけないからな。千冬姉そう言う事できない

し。

パンツッ！！

「さあ、SHRは終わりだ、諸君にはこれから一ヶ月でISの基礎知識及び基本動作を覚えてもらう。いいか、良かったら返事をしろ、よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

「はい！」

「……分かりました」

「分かりましたが、なんでまた叩いたんですか？」

キングクリムゾン！ クラス代表者決定の前まで飛ばされる！

「待って下さい！ 納得ができませんわ！」

「できませんわ！」

「……できませんわ」

エコーがかかっていたと思うのは俺だけだろうか、多分そうなんだろうな。みんなキョトンとしてるし。

ああ、今はクラス代表というのを決めている最中だ。千冬姉が一時間目が終わった後に居なくなってもクラスはまとまっていたんだが、この時間だけはやたらとうるさい。

「そのような選出は認められません！」

「だがそれが真実だ！」

「大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！」

「……ですわ（笑）」

「わ、わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか!？」

「おっしゃるのですわ!」

「……ッッ!! 貴方達は一体さつきからなんですの!？」

「なんですのと聞かれたら!」

「……答えてあげるが世の情け」

「雄太!」

「……賢太」

その瞬間

ガッツシャーーン

窓から真っ白な何かが飛び込んで来た。

side 華瑠魔

やあ皆さんこんにちは、ちょっと吐き気がする転生者です。え？
何故いきなりそんな事に、だって？ 簡単な話しさ——

今俺は、空を飛んでいる。

い、今起こった事をありのままに話すぜ！

『部屋で寝てたら阿修羅が目の前にいたと思ったらいつの間にか空を飛んでいた』

な、何を言ってるのかよく分からねーと思うが自分でも何があったのかよく分からねー。ただ一つ言えるのはこれは超スピードや催眠術とかいうチャチなもんじゃねえ、もっと恐ろしいモンの鱗片を味わったぜ……。

さて、某奇妙な冒険をする漫画風に現在の状況を整理してみた訳だが、はつきり言って意味が分からん。何でも良いけどそろそろ向こうに見える窓にぶつかりそう――あ、窓開いてた。

「賢太だか雄太だか知りませんが貴方方のような子ども達がわたくしに――」

ゴツツ！！

――あーあー、頭良好、感度良好524。俺を割っても小さい俺は出てこないよ。

「あー、やっと姉ちゃんきたー！」

「……遅刻だよ、姉さん」

「おー、我が弟達よ。何でも良いけど姉呼ばわりすなって何度も言ってるだろうが」

やっべーやっべー、何か金髪にぶつかっちゃったよ。俺は生きてたけど向こうは平気か？

「……あ、貴方は一体なんですか!? このわたくしにいきなりぶつかって来たりして!!」

「そりゃ阿修羅様に言」

「——誰が阿修羅だって?」

「そりゃあ阿修羅って言ったら俺を飛ばした——」

今気付いたけど、人って死期を悟ったら案外冷静になれるのね。

メメタアッ!!

「今なんか○ヨジョっぽい音したけど大丈夫か!?!」

「大丈夫だよ、姉ちゃんは不死身だもん!」

「……ドMですから」

「ヘイマイブラザー、勝手に人の性癖捏造しないように」

わりかし体が頑丈にできてる俺。これも転生時のチート補正かもね。

「……ひとの話を聞きなさいですわあああああああああ!!」

「え？」

「え？」

「え？」

「……え？」

だれ？ この人。後俺の頭からなんか柔らかい物が出てる感覚がするんだけどこれ何？

第五話 一生自分の視点しか見えないってもしかしたらちょっと不便（後書き）

最後の方はやつつけだなんて言えやしないよ、言えやしない……

人の名前が覚えられなくなったのは年食った証拠

前回までの全開なあらすじ。

寝てたら飛んで脳味噌はみ出た。

「ちよ、お前！ 何か頭から出てるから！！」

「で？ 今何してる最中？」

「……最中を食べてる最中」

「字面でしか分からないギャグをどうもありがとう賢太。でも嘘じやなくて事実が聞きたいかなお兄ちゃんは」

「学級委員を決めるためにみんなが皆押し付け合ってるところだよ！」

「ち、違いますわ！ 私がその野蛮な猿に身の程を教えて差し上げようとしていた所ですわ！」

「ウキ？」

「……ウキキ？」

「「うききききき！」」 m9

「もおおおおおおお！！！！ なんなんですの貴方達は！！！」

「なんなんですのと聞かれたら！」

「……答えてあげるが世の情け」

「いや、二回目じゃんそれ」

「雄太！」

「お、思い出したぞ」

「良いですわ！ さあ私の名を早く言いなさい！」

「チョロリア・コルセットだっけ？」

「全然あってませんわ！」

「あれ？ じゃ。パツキン・タテロール？」

「それは私の髪型の事でしよう！？ セシリア・オルコットですわ！」

「分かったよチョロリアさん」

「セシリアですわ！」

「パツキンさん」

「セシリアだっつってんだろがアアアああああ！！」

怒られた。

「で？ なんなんだよセロリア・コルク抜きさんは、何の用なんだよ？」

「いい加減人の名前を覚えなさい！ ……もう良いです、貴方達、決闘ですわ！」

「「だが断る」」

「ひどいな朽木組」

「決闘なら無花果君がやってくれるよ」

「一夏な。って、なんで俺！？」

「いや、ほら。君モテそうな顔してるから。爆発しろ」

「なんで真顔で毒吐かれなきゃならんの！？」

パパンッ！！

「まってまって今脳味噌でてるからこれ以上出たら死んじゃうから」
「ッ痛ウ……、普通脳味噌出たら死ぬけどな」

「いつまでも漫才をやっているな。来週の月曜、織斑とオルコット、

それに朽木兄弟も第三アリーナで決闘だ」

「えー、俺もー？」

「はーい！！」

「……わかりました」

パンツ！！

「教師には敬語を使え」

「なんで阿修羅に敬語を……あ、阿修羅様なら敬語使って当然ですね、スミマセン」

パンツ！！

「誰が阿修羅だ、織斑先生と呼べ」

「いえっさ」

キンコンカーンコン

そこでチャイムが鳴って授業が終わりになった。一、一……いつくん（仮名、今度からちゃんと名前覚えよう）が「一回頭を叩かれると五千個脳細胞が死ぬんだぜ」とか言っていたが、俺の脳細胞はそこまで柔じゃない。

人の名前が覚えられなくなったのは年食った証拠（後書き）

なんとか年内に投稿できてよかった……短いけど。

え、お、俺！？ ……こ、今回もよろしくです（by一夏）

前回までの特に全開でもないあらすじ。

母がコルク抜きだった。

「「いい加減名前覚えろ（覚えなさい）！！」」

side 一夏

さて、なんやかんやあって俺とあのイギリス人と子供二人（十変人）で決闘をする事になったのだが……

「ぐぬお……授業内容が全くわからん……」

授業に付いて行けなかった。何だあの授業、反重力なんたらとか流動なんたらとかいきなり言われても理解できないぞ。

「大丈夫だ織斑、俺は分かりすぎて逆に分からん」

「一夏でいいよ。てか、それもう意味分かんねえから」

なんやかんやあったが朽木は俺の名前を覚えたようだ。うん、人の

名前を覚えるのは大事な事だぞ。

「一夏は馬鹿なんだね！」

「うっ……見た目小学生に言われるとくるもんがあるな」

「……実際に小学生」

「え、ええええ！！　じゃ、じゃあやっぱり二人も授業分かったのか？」

いくら何でも（見た目）小学生にあの高度な授業が分かるはずがないと思ってこっそり見てたんだが……。そうなると本腰入れて勉強しなきゃだめみたいだな。

「あー一夏、そいつらを小学生と思ってちゃダメだ。はっきり言って化け物っつー表現がピッタリなモンスターチルドレンだから」

「いやいや、だってどうみても普通……じゃないけどそんな、まさか千冬姉みたいに人間捨ててるとは思えないぞ」

パンツッ！！

「誰が人間捨てているんだ？」

「マジすみますんでした千冬姉！！」

パンツッ！！

「織斑先生と呼べ、馬鹿者が」

「阿修羅様」

メタァ！！

「どーも真にあいすいませんでしたー」

「朽木兄、私が直々に戦闘訓練の相手になってやろう」
「バトルジャンキー乙」

メメタァ!!

「お、織斑先生!! 一体これはどういう状況なんですか!?!
何で朽木君が頭から真っ赤な液体をドバドバ流してるんですか!?!」

「あー、山田先生だー!!」

「……相変わらずのナイスおっぱい」

「へ? きゃ、きゃあっ!!」

「……ていう、一夏の心の声が聞こえたので、代弁しました」

「お、織斑君っ!?! せ、先生と織斑君は教師と生徒という関係なのでそう言う事はできるだけなしで……でも、私男性とおつき合いた経験もないから、その……や、優しくして下さいね?」

「いや、なんの話ですか山田先生!?!」

「……織斑、後で生徒指導室に来い。少し話がある」

「……ジーザス」

これはもう、死んだとしか思えないような確実に。
そこでポンポンと肩を叩かれる。振り返ってみると朽木が親指を立てて

「骨は拾ってやる」

「死ぬ事は確定なのかよ!?!」

「ま、骨は拾ってやるから骨だけ残して死ね」

「命令形!?!」

なんてこった、他人の目から見ても死刑確定なのか。

「そんな事より山田先生、一体なんでここに？」

「自分の命をそんな事呼ばわりは……って、そ、そうだ！ 織斑君
織斑君！？ 重大発表ですよ！？」

「重大な 発表を何故 忘れるか 俺」

「座布団マイナス二千枚！」

「……さらにマイナス五千枚」

「弟達ありがとう、俺もう泣きそうだよ感動ではなく心が痛くて」

「そ、それは朽木君が頭から真っ赤な液体をドバドバ流してたから
ですよー！！？」

「違うぜ山田先生、これは真っ赤な液体ではなく俺の血潮さ」

「ちよっとカッコいい感じで言わないで下さい！！ それ死んじや
いそうになってますよー！！？」

「ダイジョーブだよヤマヤ先生！」

「……姉さんの生命力はゴキブリ並み」

「そうそう、それでもってゴキブリばりに暗い所が好きってバカ。
何言わすんだ」

パンパンボクショッ！！

「いい加減山田先生に連絡事項を言わせてやれ、バカどもが」

「ごめんなさいーい」

「……ごめんなさい」

「申し訳なかったっすけど俺だけ威力違い過ぎね？」

朽木兄弟の犠牲（犠牲は兄？ 姉？ だけ）によって話は元に戻っ
た。

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

そう言って部屋の鍵が俺に渡される……って、

「俺の部屋、決まって無いんじゃないか？ 最低一週間は自宅から通うって……」

「そうなんですけど、事情が事情なので……」

「……分かりました。じゃあ、俺はもう部屋に行くんで」

「あ、ちょっと待って下さい！ もう一個連絡があります！」

立ち上がりかけた俺をのしかかるようにして引き止める山田先生。
……この体勢は、はつきり言って――

「あ、あのー……山田先生？」

「え、えっとですね、男子は大浴場の使用が禁止となっていますので、織斑君は注意して下さいね！」

「いや、はい……。じゃなくて、あの……」

「へ？」

「……どいて……もらえます……？」

「え、あ、あああああああ！？！？！？」

顔を真っ赤にして慌てて俺から離れて行く山田先生。おーん、ひよつとしたら少し惜しい事を――

パンツッ！！

「ほら、さっさと部屋に行け。生活必需品は私が用意しておいて既に部屋に行っている」

「わ、分かりました……。って、あれ？ 朽木達は何処へ？」

「あいつ等なら台詞13個前位の時点で教室から出て行ったぞ」

「メタ発言禁止！！」

え、お、俺！？ ……こ、今回もよろしくです（by一夏）（後書き）

次はオリキャラと簪ちゃんとの絡みが……やっと思ける……！！

人間関係って思ってるよりも簡単（前書き）

今回の話には……というより、今回もISが出てきません。正直いつ出せるか分からないです。とか言ったらボコにされそうですけど。今回はほぼオリキャラと簪ちゃんの絡みです。簪ちゃん可愛いよ簪ちゃん。

人間関係って思ってるよりも簡単

side 華瑠魔

「よし、お前等アリーナ行って訓練してこい」

「えー」

「……えー」

「えーじゃねえ、今から簪さんの機体調整に行くんだよ。お前等が付いてくると面倒なんだよ」

「……僕なら、手伝える」

「俺もー!!」

「雄太は無理だろ。つーかぶっちゃけ作者が大勢のキャラ動かすの無理なんだよ。行っただけいいけど空気になりそうだから最初から減らしときたいんだよ動かす人間を。分かったか」

「はい」

で、ただ今整備室に向かっている俺だが――

「あの人だよな? 初日に窓から突っ込んで来たミイラって」

「なんか、千冬様の攻撃をこれでもかという位に受けても平気だったんだってー」

「えー、それって本当に不死身^{ミイラ}じゃない?」

とんでもねえ噂流れてるウウウウウウ!!!!!!

いや、確かに外見ミイラだけど。包帯ぐるぐる巻きだけど。でも不死身じゃないから、結構死にかけてるから。

「お、ここか。整備室3」

職員室の先生に聞いた所、更識簪ちゃんはいつもここにいらっしゃるらしい。
さて、早速入ってみますか。

「お邪魔しまー――

「『Congratulations!!』」

「『ヌアアアアアアアア!!!!』」

いや、バーチャロン？」

しかも俺に気付いてないし。

「『テレレッテレレッテレレ』」

「……ハッター、使えない……」

「オイ待てコラ」

軍曹デイスってんじゃないよ、あの人接近戦最強だぞ？ 一撃でクリアリアのライフ半分削るんだぞ？

「今度こそ、負けない。ストラトス……!!」

「いい加減気付けや」

てか、ストラトスにハッター呼んでくるて、お前下手か軍曹好きか？

「ハッ!？　だ、誰!？」

「いや今かよ、今気付いたのかよ」

そんなたった今気付きましたみたいな顔されても。ていうか慌ててP S 2片付けようとすんな。もうバレてっから。お前が機体作成さぼってゲームしてたのバレてっから。

「貴方は、だれ？」

「えー、倉持の人から聞いてると思うけど、更識簪さんのI S開発の手伝いを任された朽木です。ひょっとして簪さん？」

「そう。だけどいらぬい。私一人で組み上げる」

「……なんで？」

「姉さんに、負けたくないから……!!」

「本音は？」

「ゲームしたりアニメ見たりする時間が減る」

「……即答かよ」

「ハッ!!　だ、騙したの!？　誘導尋問!？」

「いやどう考えてもお前が勝手に引っかかっただけだろ」

予想以上に面倒臭がり屋だった、更識簪。てか本性バレたからってまたP S 2出すな。ちゃんと専用機組み上げやがれ。

「てか、そんな面倒ならなんでこんな事引き受けなんだ？　倉持に任せちまえばいいのに」

「……姉さんを、超えるため……!!」

「本音は？」

「このまま放置しておけば専用機なしでクラス対抗戦とか出なくてすむから」

「お前本当にグータラだな。てか、姉への嫉妬心的なのは無いの？」

「一ミリも」

「じゃあお姉さんに頼めば？」

「……あの人とは、関わりたくない……！！（ガクブル）」

おい、この人いきなりトラウマ発祥しちゃったよ。一体何があったんだ。この人と姉の間に一体何があったんだ。

「……じゃ、それは置いとくとして」

「PS2は置かない」

「それも置け」

いい加減真面目にIS造れや。

「……くっ、流石に最高難易度のストラトスにVOXleeで挑むのは無謀なのか……！？」

「勇者だなお前」

あんなマジで最弱機体を実質ラスボスに使う気になったな。

「知ってるの？ 電腦戦機バーチャロンマーズ」

「ああ知ってる。フォースからやってるかな、一応」

「私は、コレからだけど。……やる？」

「……仕事は？」

「面倒」

「……俺ハッターな」

「ハッター（笑）」

「よし勝負だ。ノーダメでぶち殺してやる」

「じゃ、私は白騎士で」

「反則機体じゃねえか。ハッターもそこそ反則だけど」

「所詮機体差には敵わないのよ……！！」

「じゃ、始めんぞー」

『GET READY?』

五分後

「……負けた……? この私が……クリアリアが……負けただど?」
「グウウウウレイトオオオオオ!!!!!!」

主人公のバトルパートが始まる前は大体サブキャラが戦っている

前回までのあらすじ

ISを造るはずが気が付けばVRをやっていた。

で、俺と簪がVRやったりVRやったりVRやったり時々連ザ2P
ULSやったりしているうちに約束の一週間が過ぎた。

「……じゃあ、行ってくるよ。簪」

「うん。……気を付けて」

「ああ。じゃあ、また今度だ」

「……絶対だよ。絶対に今度、会おうね……?」

「勿論だ。……簪」

「何?」

「おれ、この戦闘が終わったら、君に――」

「いつまで茶番をやっている、この馬鹿者が」

グツチャ!!

「俺の腹があああああ!」

「朽木――!」

「……ぐ、どうやら俺はもう、ダメなようだ……」

「何言ってるんだよ!! 生きて帰るんだろ!? 結婚しようと思っ
ている娘が居るって言ってたじゃないか!! その子のためにも生
きるよ!! 生きるんだ!!」

「……俺、は……もう、ダメ、だが……お前は……生きて……こ
の、腐った世界を……変えるんだ……簪・F・セイエイ……」

「賢太、俺もうこの二人が何やってるか分かんないよ……」

「……大丈夫、雄太。みんな、分かってないから……」

はい、という訳で試合の合間の暇潰しに簪と小芝居をやっていた俺
である。ちなみに今、一夏が一次移行を終わらせた所だ。なんてグ
ッドタイミング。

『ま、まさか……一次移行!? あ、あなた、今まで初期設定だけ
の機体で戦っていたって言うの!?』

「いつのまにかお嬢様口調じゃなくなっている件について」

「朽木、そこは触れちゃダメ。キャラ作りは大事なの」

「おもつくそ猫被ってた簪さんに言われると納得できるものがあり
ますね」

『俺は世界で最高の姉さんを持ったよ』

「今の台詞どう繋がってたの?」

……思わずずっとこける俺と簪。雄太と賢太は次の試合に備えて体を
ほぐしている。……今気付いたけど、俺コイツ等と戦うんだな。い
やだな。どうせ数に負けるんだもの。

『おおおおっ!!』

なんかライトセイバーらしきものを下段に構えてオルコットに突っ込む一夏。お、あれ決まればオルコット逆転負けか――?

『試合終了。勝者――セシリア・オルコット』

「」「はい?」「」

side 一夏

「ぶはははははははは!!!! 一夏、お前サイコーだろ!!」

「必殺技決める前に、自爆……くくっ、だっさプププー!!」

試合が終わって、まず朽木と、それから知らない女の子に笑われた。

「よくもまあ、持ち上げてくれたものだ。それでこの結果か、この大馬鹿者」

で、千冬姉に大馬鹿者の称号を授かった。馬鹿者からランクアップだ、全く嬉しくないけど。

「ま、今回は、ププツ、運が悪かったと、プププ、しか、ククツ、言いようが」

そこまで言っただけで爆笑しだす朽木。もう止めて!! とつくに俺のライフポイントは0よ!!

「ひーっひーっ、面白かった。ありがとう織斑くん、私をこんなに笑わせてくれて」

「もう止めて!! とつくに俺のライフポイントは0よ!!」

つーかだれなんだこの娘は。最初見た時はメガネのクールキャラかと思っただけで朽木と同じような人間じゃないか。

「ああ、そいつ更識簪。4組クラス代表で日本の国家代表候補生だ」

「あ、そうなんだ。どうも、織斑一夏です」

「知ってるし」

何この冷たい反応。ひょっとしてこの娘サドか？ サドなのか？

「「多分そう」」

「何故お前も答えた朽木」

そして何故心が読まれた。皆読心術に長けているのだろうか……？

「ま、読心術は今d……気が向いたらレクチャーするとして」

「そんな簡単に身に付くもんなの!？」

もしそうだったら今頃世界中で読心術が使われているに違いない。

「よし、では次は勝者のオルコット対朽木弟達だ。朽木達、準備は

いいか？」

「「アラホラサッサー!!」」

「そうか、ならさっさと行ってこい。向こうも機体の整備が終わったようだしな」

そう言う千冬姉の視線をたどると、アリーナを映し出す液晶が。そこには先ほどと同じようにブルー・ティアーズが静かに空中でダンスの相手を待っていた。

「じゃ、行こうか賢太!!」

「……うん、せーの」

「変身!!」

二人が腕を顔の前でクロスさせ、そう言った瞬間、辺りが一瞬光で見えなくなる。が、そう思った直後に光は消えた。そして、代わりにそこにあったのは――

「正義の炎で悪を燃やす、ジャスティスレッド!」

「正義の水で悪を凍らす、ジャスティスブルー!」

「二人あわせて、(せーのっ)」

「「正義戦隊、ジャスティスレンジャー!!」」 (ドドン!) ↑

双子の背後で赤と青の爆発

「あ、正義戦隊ジャスティスレンジャーだ」

「簪これ知ってんの？」

「うん。ちなみに私のお気に入りにはジャスティスグリーン」

「ダークジャスティスの魅力を知らないとは憐れな」

更識さんと朽木が何やら言い合っているが、そんな事はどうでもい

い。俺は双子から眼を離さないでいた。いや、正確には離せなかった。だって――

「格好良過ぎだろ!! 賢太に雄太!!」

「「ドヤア」」

前言撤回しかけたが、まあいい。そんな事より試合だ試合。……オ
ルコット、強かったんだが、あの二人がかなうのか?

「じゃ、? 木雄太、ジャステイスレッド。出ます!!」

「……? 木賢太、ジャステイスブルー。行きます……!!」

特に決めゼルフとかないまま、赤と青の機体はアリーナへと羽撃い
て行った。というか、

「機体の名前、本当にあれなんだな。朽木」

「お前は本当に、本っ当にどうでもいい所を気にするな。一夏」

「かんちゃん知ってるよ、モッピーはたとえ空気でもメインヒロイ
ンだって」

「喧しいわ更識っ!!」

主人公のバトルパートが始まる前は大体サブキャラが戦っている（後書き）

次で、ようやくバトルパートです。正直碌なものが書ける気がしません。まあ、今碌なもの書いているのかと聞かれたら、即答で『違います』って答えられますけど。

感想や誤字脱字の訂正など、お待ちしております。

感想を書いて行ってくれと、作者のテンションとモチベーションが上がります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0707z/>

IS （元）厨二病の転生者

2012年1月13日16時56分発行